

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (心 理 学)	氏名	上 山 瑠 津 子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
保育実践を支える保育者の子ども理解と省察に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	杉 村	伸一郎
審査委員	教 授	中 條	和 光
審査委員	教 授	湯 澤	正 通
審査委員	准教授	清 水	寿 代
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、保育実践力の向上に関する知見を得ることを目的として、保育者を対象に省察ならびに子ども理解と保育実践力の関連を検討したものである。論文は5章から構成されている。</p> <p>第1章では、本研究の背景と目的を述べている。まず、第1節では、乳幼児期の保育・教育が、子どもの発達に長期的な影響をもたらすことや、保育者の子どもへの関わりや対応が子どもの発達に重要な役割を果たしていることが、最近の実証研究の知見を引用することにより示されている。そして、保育者の子どもへの適切な関わりや対応に関する力（保育実践力）には、省察と子ども理解の2つの要因が関係することを紹介している。次に、第2節では、子ども理解を起点とする保育循環モデルを紹介するとともに、その問題点として、保育実践力の向上に対する省察と子ども理解の関連や作用が明示されていない点を指摘している。また、省察と子ども理解に関するレビューを行っている。以上の検討を踏まえ、第3節では、省察ならびに子ども理解と保育実践力の関連を検討し、保育実践支援モデルを提案することを本研究の目的としている。</p> <p>第2章では、省察と保育実践の関連を検討している。具体的には、第1節（研究1-1）では、保育実践力に省察と保育経験年数がどのように影響するのかを明らかにすることを目的とし、保育士520名を対象に、保育実践力尺度と省察尺度を含む質問紙調査を実施した。省察と保育経験年数を説明変数、保育実践力の合計得点を目的変数として階層的重回帰分析を行ったところ、省察と保育経験年数は、保育実践力に対して有意な影響を与えていることが明らかになった。第2節（研究1-2）では、省察のタイプの違いが保育実践力とどのような関連があるかを明らかにするために、研究1-1における省察の下位尺度のz得点を用いてクラスター分析を行った。得られた7つのクラスターにおける保育実践力の下位尺度得点の平均を比較したところ、保育実践力の下位尺度と合計のいずれにおいても、省察高・他者情報収集高群の得点が最も高く、省察低・子ども察知低群の得点が最も低い、また、省察の全体的なレベルが中程度の場合、子ども察知の得点が低い群は高い群に比べて、生活環境の理解力と子ども理解に基づく関わり力において得点が有意に低い、という結果であった。</p> <p>第3章では、子ども理解と保育実践の関連を検討している。第1節（研究2-1）では、保育実践における子ども理解の構造とその変化を捉えるために、保育者33名を対象に、乱暴な幼児と内気な幼児の事例を提示し、場面に対する対応とその理由について尋ねる半構造化面接を実施した。対応の理由をM-GTAにより分析したところ、両事例において保育者の子ども理解は、行動特徴や内</p>			

面、背景などの主観的な捉えに基づく【子ども情報の吟味】を軸に展開され、主観的に捉えた子どもの姿が【年齢に応じた発達段階】と比較・照合されることで、相対的視点を踏まえたより適切な理解につながり、さらに、子どもに応じて経験してほしい【園生活を通じた成長期待】の意識により、今後の具体的な対応を視野に入れた子ども理解が方向付けられることが示された。第2節（研究2-2）では、子ども理解が保育実践力や対応とどのように関連するかを明らかにするために、研究2-1の参加者に、保育実践力尺度に回答を求めるとともに、研究2-1で生成された子ども理解と対応の発話数をカウントした。子ども理解と保育実践力ならびに子ども理解と対応の関連を順位相関係数により検討した結果、両者の関連が部分的に示された。

第4章では、子ども理解のメンタルモデルを活用した実践支援を行っている。本章では研究3として、保育者の子ども理解のメンタルモデルを可視化する実践支援の有効性を検討することを目的とし、幼稚園教諭4名を対象に、個別面接を月1回程度、計5回実施した。面接では、クラスの中で気になる子どもへの理解や対応について尋ね、学習者の認知過程に焦点化する認知カウンセリングを援用し、参加者自身が対象児への理解や関わり方の状態を段階的かつ客観的に把握することを促した。その結果、子ども理解の視点に関する言及数は、全参加者で増加した。また、実践支援の有効性に関しては、省察尺度では1名を除き1回より5回で得点が高く、保育者効力感尺度では、参加者全員が1回より5回で得点が高かった。

第5章「総合考察」は以下の3節から構成されている。まず、第1節「本研究の成果」では、次の3点が成果として示されるとともに、それぞれの意義が論じられている。(1) 経験年数より省察の方が保育実践力と関連があることを定量的に示した。(2) 子ども理解の様相を、保育に関する知識や信念など専門家特有の視点に関連し合うメンタルモデルとして提示した。(3) 子ども理解を可視化する実践支援を行うことにより、子ども理解ならびに省察、保育実践の向上を示した。次に、第2節「本研究の限界と課題」では、保育実践力の多面的な評価、保育実践力向上のプロセスの縦断的な検討、キャリア支援の観点からの検討、円滑な保育循環に作用する要因の検討、の4点の必要性が指摘されている。そして、第3節「今後の展望」では、子ども理解の視点が多様性や柔軟性を持っていることや、保育者のキャリアステージと個人差を踏まえて省察方法を選択することを重視した保育実践支援モデルが提案されている。

本論文は、次の5点で高く評価できる。

1. 経験年数より省察の方が、保育実践力と関連があることを定量的に示し、保育・教育実践において専門性の向上に不可欠とされてきた省察の重要性を実証した点。
2. 省察のタイプの違いにより保育実践力の下位尺度の得点異なることを明らかにし、省察の対象やレベルに着目した省察方法の必要性を示唆した点。
3. 保育者の知識の構造化の様相をメンタルモデルとして捉え可視化した点。
4. 子ども理解を可視化する実践支援が、対象児への理解や保育者自身への理解を深めるのに有効であることを示した点。
5. 上記の成果を踏まえ、保育実践力の向上に対する省察や子ども理解の働きを組み込んだ保育実践支援モデルを提案した点。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 3年 2月 8日